

大 学 地 考

藤 井 健 造

大手前女子大学は、西宮市御茶家所町に建つ。その地名の由来する所を先づ考察するに西宮の市制が実施される前、ここは武庫郡大社村字守具（森具）と言われたものであって、西宮村とは同郡内であるが西川をはさんで飛地になっていた。

現時の夙川は江戸末期か、明治初年の頃に改定されたものらしく、江戸幕府が文久三年二月一日老中格小笠原長行に命じた台場築立御用掛の摂海防備図には、宿川とありここが宿村であつたらしい淵源につながる地名であつて、そこにはこの地方由緒に基因するものが潜在するわけである。

徳川三百年を通じ西国より京、江戸への陸路は西宮村を分岐点とし、東南に向つて尼崎から大阪へ抜ける中国街道と、北へ折れて越水、広田、昆陽、伊丹、茨木、山崎を通る京街道があつた。これとは別に京上りを急ぐ諸藩庶民の中には西宮村の西方宿の分れ道にあつた一里塚より左方の裏道を取り広田、大市村を経て武庫川を渡り、昆陽に至る、北の街道を辿つたものもあつたと思われるふしがある。それは慶長十年（一六〇五）の摂津国絵図にはこの村を宿火村と書いてあつて、当時の宿荷所であつたことを裏書きしている。

遠き古えのこと、務古の入海が越水、広田の山裾まで広がっていて、西宮村がまだ地形されていなかったと証推される古墳時代では、この宿村から越水、広田の山すそを通過して昆陽より上方に至る街道（古書、海道）がただ一つの道であつたことは、この土地の洪積層化石分布線の海陸地形図に依証出来ると共に後醍醐天皇が元弘三年六月二日、隠岐島より還幸の砌通られたのもこの道であつたことは楠氏が志貴右馬允に与えた書状に史証がある。

豊臣秀吉が天下を治め大阪に築城するに当り諸侯に命じ、瀬戸内諸島より巨石を徴発したが、それと同時に多量の御影石が西宮港より船積みたは陸路で大阪に運ばれ、そのときに西宮の商運大いに動き、ために近世への発展に必要な財力を築くことが出来た。

戦国兵乱の後、信長は畿内の都市を直領とし、摂津、和泉の寺領には矢銭を相懸くとしたので、元亀元年八月（一五七〇）信長が本願寺攻略の為大阪に下向したとき、西宮町方から多額の金員珍宝を携えて信長の歓を迎えいてる。信長はこれに対し天正八年三月の朱印を以て摂津西宮に対し地内安堵の禁制を認許した。

かくして源平時代から、足利時代に亘りて、人馬軍糧の往来殊に多く、西宮地方を中心とする摂津は富力を高め戦利を掌中した。その帳元をなすものはこの武庫西宮の町方、浜方の豪商達であった。

平安時代のこの地は、京と西国を結ぶ陸運の要所であったから、天朝、諸卿の奉幣社として広田、西宮社の社格はとみに隆高した。四季の佳き日吉き日に齋行された貴族の社頭歌合など藤原俊成自筆の国宝広田社二十九番歌合集により残っている。又万葉の代表歌人山部宿禰赤人は

武庫浦をこぎたむ小舟粟島を

そがひにみつつとしき小舟

とよみ、この浦の漁人舟の多かつたことを歌っている。

上古持に神功皇后の時代には、皇后と当地との史縁は極めて深い。日本書紀に、「皇后之船指難波千時皇后之船廻於海中、不能進、更還務古水門、而卜之於天照大神、誨之曰、我之荒魂不可近皇居、当御心広田国即以山背根之女葉山媛令祭」とあり、務古水門は武庫の港である。

更に遡ること千数百余年弥生後期古墳時代と当地とは極めて悠遠の結縁があると思われることは、当地を中心として半径四軒の周円内のみにても、八十塚、高塚、王子塚、処女塚、大塚、へぼそ塚、親王塚等があることによっても推知せられる。

大古貴人の葬瑩と殉死の風にみられる埴輪との哀話は次の五条少納言菅原為璞直筆の家系之由来に曰ふ如く切々として今なお人々の心をうつものがある。

垂仁天皇の三十三年皇后日葉酢媛命薨ずその時野見宿禰土偶を以て殉死の身に代えんことを奏請し、帝嘉してこれを納れ永制となし給ふ。此時に方り殉死を免れたる臣等微服潜行して妻子を携え率いて都を去り、所縁を求めて寄寓し処々に蟄居す。吾摂津国に住する世系を訪ふに、人々その姓氏を隠して言わず、しかも其氏族の連綿たる者幾千歳。そのためかえって遠祖の姓名を失う者多し。ここに於て野見宿禰の後裔五条大納言菅原為康これを愍み遠祖の由緒あることを以て土師の姓を称号することを許す。即ち宿村は菅家今旧記系図考にある摂津国武庫郡殉臣の

大学地考

村々の一つである。

この故を以て往古殉臣村と称し又宿禰の由緒より宿村と唱えたるを、後世、守具村となり、明治七年森具村と改め、夙川と通名して今日に及んでいる。

大社村字森具にある福井治兵衛（本学創立協力者）邸は、東は仏坂、西は大師道に接した広い高台である。今もその地内に老松の森あり。小祠を建てて献燈する。この一帯は古墳地であって、往時には上の池、下の池があったので水の祭神貴船社が祭祠せられていた、と古村誌に書録されている。

太古代より淵源二千余年、大和朝史創建の古昔より、下り下りて昭和の今日に至る続縁の地に、今後幾春秋にも及ぶべき本学の礎を、固め固めて建て造る所以又故なきに非るなり。